

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	轉換期の沼は歌ふ : 詩
Author(s)	佐々木, 範男
Citation	龍南, 2 1 2 : 4 5 - 5 1
Issue date	1929-12-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6920
Right	

轉換期の沼は歌ふ

佐々木 範 男

脾弱なる羣の一群に圍繞せられし沼よ、

虚妄への短かき存在のために

幾たびか汝が水底に死滅せる魚群の

理性と感性を、空しくも反芻せしことか。

傷つきし沼よ。

汝はその沈鬱なる水面に

痲痺したる銅の鏡のごとく

病める月光と星芒を貪欲に吸引した。

汝はその歪曲されし光と影に

不健康な審美を肯定し

繊弱なる感傷の夢幻を延べ擴げた。

汝が纏ふ藍襖のごとく痙攣する葦の葉末は
錯せる神経の末梢を凍死せる風にさらし
利己的な思索に惑溺した。

汝が重苦しき懶惰の泥より洩れる歌曲は
無力を訴ふる歎歎のごとく

汝が遣る瀬なき苦惱と困憊のために、

蒼朧めし琥珀空の燐光に空しき慰藉を求めた。

されば汝が奏でる葦笛は

永久に希望と熱情への歌曲を忘れたのだ。

冷やかなる沼よ。

汝が巢窩に棲む魚群の血にも似し冷たき論理は、

倨傲に満ちし汝が理智の玩弄に酔痴れた。

音かなる論理は壊敗へのモザイクな公式の建築を

その軟弱なる泥土の上に築いた。

その欺瞞のためには恰好の逃避所なのだ。

汝が陰濕なる戀情よ。

そは異端者のもつ唯一の熱情だつた。

沈黙の裡に流れる霧の懷に溺れゆく

汀の一片の花影に

汝は狂人のごとく全てを捧げ熱愛した。

そは靜謐が生む魅惑のために、

靜止せる美のゆえに。

しかもそは汝が虚ろなる魂の

一瞬の充満に過ぎなかつたつた。

沼よ。陰濕に黒づめる自我の棲家よ、

汝は錆びつきし水門をもつて

許多の生命の激流を

虚妄に満ちし努力で堰き止めんと急いだ。

何時かは襲ふべき嵐の前の

短かき異端的自我への逃避のために。

さはれ今は、奔驅する嵐は

靜謐に息詰まりし汝が頭上に騒ぐのだ。

嵐の咆吼に汝が慘めなる魂は叫喚し、狂顛し

汝が狹隘なる棲家に脱走した。

痙攣する葦の葉は

狂燥する惡魔の亂髪のごとく

暗迷の闇にその體を振盪し、

飢渴せる嵐の前に自らを犠に捧げるのだ。

冷却せる理智を擁して彷徨ひし魚群は

痙攣的な狂顛の中にその死を速めた。

汝が慘めにも臨終する戀情の嗚咽は

嵐の喧囂に掻消された。

おゝ鬱積せる懶惰の思想と感情の没落よ、

葦の葉に宿る露の短命にもまして短かき存在よ。

さはれ、無氣味なる哄笑を残し搔亂の嵐は疾過した。

沼よ、汝が眼前には

澄澗たる精氣が遍滿し、流動する。

暗闇の怖れと争鬪の戦に混濁せる水面より

今や金色に耀く希望と熱情への雰氣が、歌曲が

早晨の蒼穹へと高揚する。

おゝ激情の晨よ。

騷擾の嵐の餘喘に蠢動する晨よ。

おゝ沼よ、欣喜の耀きに滿々たる沼よ

汝が魂は沈淪より高揚に醒めゆく喜に搖動する。

病める星辰の燐光に歪曲せし蒼穹には

今や情熱的な光輝の狂ほしき旋回がある。

醒めゆく沼よ、

狂燥する嵐の暴虐に倒れし葦の骸に、
混濁せる汝が水平に漂ふ一片の花弁に

虚飾を剥がれて崩壊せる欺瞞の建築に
又そがうづ高き疊積の下に逝ける魚群に
今や愛慕に代へるに罵倒を投げかけるのだ。

遍満する陽光に蠢く汝が心臓の一搏々々を
水門の側に奔馳する汪洋たる大河の鼓動に合致せしめよ

おゝ炎上する炬火のごとく赤き血潮の流れに
喧囂する無数の魂の叫びに聽入れよ。

そは枯渴せる廢頤の巖を裂きて誕生し
無際限の大地に人類に侵潤し
打ちわなゝく熱狂の数知れぬ魂を
その高踏する波浪の上に浮べて

彌滿する太陽の輝の下に激昂しつゝ
光榮と歡喜の河口へ驀地に跳進する。

破れし葦笛の歌に比して
如何に情熱と欣喜に躍動する音律よ。

おゝ燥亂の渦中に 狂ほしい許多の激情が産出す
光輝に満ちたる眞理よ、莊大なる秩序よ。

沼よ、醒めゆく沼よ。

希求するがいゝ、第二の嵐の襲撃を。

そは、汝が爛れる情熱と意力にて

鏝びつきし鐵扉を解放するのだ。

狹隘なる自我より、咆吼する無數の魂の激瀾の中に、
汝自らを高揚するために。